

第3期札幌文化芸術円卓会議 第3回会議

会 議 録

日 時：平成26年5月13日（火）午後6時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 12階 2号会議室

1. 開 会

○事務局（加茂市民文化課長） 定刻となりましたので、ただいまより、第3期札幌文化芸術円卓会議の第3回目を開催したいと思います。

ご議論いただく前に、年度が変わりまして、文化部長以下事務局のメンバーの変更がございました。かわった職員のみ、簡単に自己紹介をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○事務局（川上文化部長） 皆さん、こんばんは。

先ほど名刺交換をさせていただきましたけれども、この4月から文化部長として参りました川上と申します。

前職は国民健康保険とか国民年金といった社会保険分野でして、芸術分野の世界は全く初めてでございます。4月からあっという間に1カ月がたってしまったなということで、日々勉強している最中でございます。

この円卓会議につきましては、各委員から活発なご議論をいただいているというふうに聞いております。特に、今日は、各委員の先生から具体的な事業アイデアが出されるということで、非常に楽しみにしております。これを何とか今年度中にまとめ上げて、市長へのメッセージという形で皆さんでまとめていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（加茂市民文化課長） この4月に市民文化課長として参りました加茂と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

前職は、シティプロモート、それから、創造都市ということで、ユネスコの創造都市ネットワークに札幌市が加盟するというので、その仕事をしておりました。昨年11月にユネスコのネットワークに加盟できましたので、これから創造都市をどういうふうに進めていこうかと考えていたところ、4月にこの文化セクションへの異動となりました。

この会議でも創造都市というワードが過去にたくさん出てきていると思いますが、その辺は若干の知識がございます。いかに札幌を創造都市にしていくかということで、これから頑張っていきたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（高橋調整担当係長） これまで、サポートでは入らせていただいたのですが、今年4月から、正式な担当の調整担当係長となりました高橋と申します。

今後とも、皆様のお役に立てさせていただければと思います。調整等で何かと不備あるかもしれませんが、精いっぱい頑張りたいと思いますので、ご容赦いただきますよう、よろしくお願いいたします。

○事務局（松平市民交流複合施設担当係長） ご報告が遅くなってしまったのですが、4月からこの円卓会議でも議論になっているアートセンターと、旧厚生年金会館が老朽化しておりますので、その後継施設となる高機能ホールを含む市民交流複合施設を平成30年度に設置する予定となっております。私は、4月からそちらの専属の係長になり

ました。

委員長、副委員長を初め、委員の就任を依頼したり、広報さっぽろ等で公募していただいた委員の皆さんと、委員と事務局という立場が違いますけれども、一緒につくり上げていきたいという思いがありまして、正直、残念なところがありますが、引き続き文化部におりますので、今後とも何とぞよろしくお願いいたします。

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、早速、北村委員長、南副委員長にマイクをお渡ししたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 議 事

○北村委員長 皆さん、こんにちは。

年度がかわりましたけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

最初に一つご報告しておきます。

私たちは、3期目の円卓会議ですけれども、2期目の円卓会議を主催していただいた伏島さんが3月にお亡くなりになりました。アートセンターのことに大変関心を持って、その実現を楽しみにしていたのではないかと思います。伏島さんの思いどおりになるかどうかはわかりませんが、アートセンターはできますので、これから私たちでなるべくいいものをつくっていければいいなと思います。

それでは、早速、今日の議事に入りたいと思います。

前回、皆さんにお願いしたのは、今日も表になって出ていますが、1人10項目ぐらい、この先、3年とか5年、10年ぐらいのスペースで札幌市を見たときに、この札幌が芸術文化の豊かなまちになる方策を、細かなものから大きなものまでご自由に出していただきたいとお願いしました。僕は頭が固いのでなかなか出なかったのですが、皆さんには大変お出しただいて、事務局でこういう表にまとめていただきました。

最初に、石川委員から順番に、表は出ているのですけれども、つけ加えるようなことがあれば、あるいは、説明もかねて、また私の思いとは違うみたいなことがあれば、ご説明いただければと思います。よろしくお願いいたします。

○石川委員 では、簡単に一個一個説明していく感じでもいいですか。何か質問がありましたら、説明が終わった後でも途中で構いませんので、遠慮なくしていただければと思います。

私のほうでは、見てのとおり、10項目ほど出させていただきました。一つ一つの説明は軽くしていきたいと思いますが、総論として僕が言いたいいろいろな案の共通するコンセプトは二つか三つぐらいしかありません。

一つは、僕が今、ここに参加させてもらう中で一番興味があるのは、ふだんアートに余り接していない人とか、ふだん別に特にアートに興味がないような一般的な人という言い方も変ですが、そういう人に、札幌がいかに創造都市であるとか、芸術祭の意味をわかってもらうということが私の色々な案に共通する意味だと思います。それが一つです。

あとは、こういう場で言えることではないのですけれども、もし札幌が創造都市を名乗るということでしたら、やはり、札幌市の構造全体、組織自体、創造都市さっぽろを盛り上げるのだということを、全部署を挙げて取り組んでいかないとだめなのではないかと思っています。それを踏まえて、一つ一つ簡単に説明していきます。

一番最初は、さっぽろ市アートボランティアです。これは、今も芸術祭のボランティアも募集していますけれども、そういった特別なことがなくても、常にいろいろなボランティア、それは普通の市民から有識者も含めて、いろいろな作業的なこともやってくれる人がいたり、プレーン的な立場で意見してくれるような人を登録制みたいな形で常に人材をストックしておいて活用することによって、札幌のアート活動について、いろいろな人の意見を取り入れることもできるし、市民もアートの活動の参加を通して芸術についても興味を持ってくれるのではないかと思います。提案しました。

1から10までありますけれども、別にやりたい順番ではなくて、適当です。

2番の窓口・入口アートは、個人的には一押しの一つで、区役所や中央図書館、本庁の窓口とか入り口にアート展示をしようということです。なぜこんなことを言うかということ、私は、ふだんは普通の勤め人ですが、中央区民センターが職場に近いものですから、よく職場の人事課や総務課が住民票を出せとか印鑑証明を出せとなるとみんな昼休みに住民票をとってきたよという話になります。やはり、普通の人が市役所やそういう機関に行くのは、戸籍窓口が一番多いと思います。職場で戸籍窓口に行った人に聞くと、窓口に行ったらこんなことがあったという話があるので、普通の人が一番接点あるのはそういったところではないかと思うので、いかにも普通の人が来そうなところにアート展示をする、プラス、札幌市はそういった取り組みをやっているのだということをPRできればいいのではないかと思います。窓口・入口アートを考えました。

次の3番目は、2番目と似たようなものですが、封筒等のツールのリニューアルプロジェクトです。僕は、仕事とか個人的にも札幌市の封筒を何回かもらったことがあります。時計台が1色印刷で出ているものですね。やはり、あの封筒で創造都市と言っているのかということがあります。封筒みたいなツールは、一般市民とかいろいろと外部に触れられるものなので、そういった触れられるさげないものから札幌市はアートの取り組みをやっているのだというところを見せるためにも、封筒や外部に出るような便せん、送付書のようなものにも芸術文化を感じさせるようなデザインがされるといいのではないかと思います。

次に、4番目が500メートル美術館プラスメートルです。僕は、500m美術館が非常に好きで、あれは僕が考える本当に普通の人々が美術に接することができるとてもいい機会なので、これをいろいろな地下鉄駅でやって、500メートルをどんどん伸ばして行って、1キロメートルでも2キロメートルでも全部足すと琴似駅は100メートルとか、北24条は10メートルとか、そういった形でどんどん伸ばしていったら楽しいのではないかと、500メートル美術館プラスメートルを考えました。

札幌市ホームページ早引インデックスに文化・芸術項目は、僕は札幌市のホームページをよく見るのですけれども、トップページのちょっと知りたいところにクイックにアクセスできる場所があります。そこにも文化芸術に関する項目をふやしてみたらどうでしょうかということですが。

6番目は、札幌市の全部署でアートに取り組むプロジェクトです。前回の会議の中で、清掃部と組んでアートの活動をすればいいのではないかというお話があって、そういうことはすごく重要だと思います。やはり、文化芸術をつかさどる部署だけ頑張っても、札幌市がクリエイティブシティとか創造都市と認知されるのは難しいと思います。別に全部署の人間が芸術の勉強をしろといった話ではなくて、文化芸術に関する活動を業務として、しかも定型的に毎年全部署で取り組むような、それは本当に小規模なものでも構わないので、本当に札幌市職員の皆さん全員が札幌市は創造都市で、アート、文化芸術で盛り上げているのだという意識を高められるようなプロジェクトができればいいのではないかと考えています。これは、本当に内部のことですけれども、どうしても直接やっている部署とやっていない部署で温度差が絶対出てくると思います。ただ、その温度差は減らせるようなことですし、市の職員の皆さんが札幌市は文化芸術都市だ、創造都市だということを意識していろいろやってもらわないと、それが一般に認知されないと思います。職員が余り認知していないのに一般市民が認知できるわけがないので、そういったことをしていただければいいと思いました。

7番目がアートセンタープロジェクトです。これは、ほかの方の意見にも同じようなものがあつたのですけれども、アートセンターができてからいろいろなことをがちゃがちゃやるのではなくて、今の段階からアートセンタープロジェクト、アートセンターに必要なソフトウェア、人材の部分をもう整備して、本当にその人たちの意見がアートセンターの設計そのものに反映できるような、やはり、建築物はできてから直すのは大変ですから、こういったニーズがあるからこういった構造にしてほしいとか、これぐらいの数の部屋があつたらいいねというアートセンターの建築や設備に関しても意見が言えるようなチームをもうつくっておいていいのではないかと考えました。

8番目は、さっぽろ創造都市CMをつくるです。札幌創造都市のCMは、私もユーチューブで見ました。多分、ユネスコ絡みだと思うのですけれども、CMみたいなものをつくられて、すごくスタイリッシュで、僕は何回か見ていました。あれは、アカデミックな感じですが、札幌市は創造都市だよという映像を札幌市のアーティストがつくって、そういうものがユーチューブとかにCMとしてあって、いろいろな人に見てもらおうと、札幌はそんな文化創造都市もやっているのだということがCMとしてわかりますし、バイリンガルとかでつくっていただければ、札幌市は創造都市ですよということが世界中にPRできていいのではないかと考えました。

それから、札幌市のホームページ改装プロジェクトです。これも、今のホームページがすごく嫌いというわけではありません。札幌市はサッポロスマイルとかいろいろあります

が、僕が一番見るのは札幌市のホームページなのです。いろいろな行政的な情報とか、ごみの分別はどうすればよかったかなと思ったときに、一番見るのは札幌市のホームページです。やはり、札幌市のホームページ自体、創造都市や芸術に力を入れているのだと一目でわかるようなデザインにすれば、日本国中及び世界各地にPRできます。札幌市のメインのホームページを創造都市にフィットしたようなデザインに変えていただけないかという要望です。

最後の10番ですけれども、クリエイター茶話会です。本当に、月に1回程度、札幌市役所のこういった会議室を使って、市の関係者と札幌で文化芸術活動をやっているような人が気楽にお話できるような場をつくっていただければということです。これは本当に一種のイベント的ではあるのですが、私としては、札幌市役所の本庁の中で必ずやっていただけないかという要望があります。なぜかというと、どこかの特別なホールを借りるのではなくて、札幌市役所に来てもらうことで、文化活動している人と市の人の距離感が縮まると思うのです。私も、こういった機会がないと札幌市役所本庁に来ることなんてほとんどないわけです。そうすると、市役所は遠い感じがするのですけれども、こういった形で数回来て、見ただけで、市役所の距離感がだんだん縮まっていくような感じがしています。市の本庁を使って、いろいろな人が交流できるような場をつくと、市民のほうからいろいろな提案や声をかけやすいような雰囲気がつくれるのではないかと思います、こういった意見を書きました。

以上でございます。

○北村委員長 ありがとうございます。

全体のまとめは、皆さんのお話を聞いてからにしたいと思います。

例えば、ボランティアであるとか、アーティストの茶話会であるとか、実際にアートセンターに携わる人という人の問題と、封筒であるとか、ホームページのような、かつて言われたようなC1、コーポレート・アイデンティティーみたいな形の札幌市版でしょうか。

○石川委員 そうですね。要するに、ブランディングみたいなことです。

○北村委員長 ブランディングを考えるとということから、入り口アートや500m美術館をプラスでやるというように、接する機会をふやすということですね。

○石川委員 やはり、特にアートに興味のない人に、札幌市は創造都市だよと認識してもらうことが一番大事だと思います。

○北村委員長 ありがとうございます。

皆さんからは、後でまとめてご質問を受けたいと思います。

次に、尾崎委員、お願いできますか。

○尾崎委員 一つ一つ説明する前に、皆さんの意見を読ませていただいて、表現の仕方は違えども、根本的に思っているところ、札幌市ではこういったものが足りていないとか、やっているけれども、目に見えていないことは、委員の中で共通する部分は十分あると思って読ませていただきました。

一つずつ簡単に説明していくと、1番の観光情報ステーションは、現在の観光情報ステーションでは、何だかよくわからないなと思います。ただただ置いてあるという状況で、いろいろなイベントのフライヤーもデザイン的に考えられているものもたくさんあります。そういったものを見やすいように配置するだけでも、ちょっと時間が潰せるような場所になるはずですが、ほかの方の意見でもありましたが、観光の情報も含めてコンシェルジュみたいな人がいるのであれば、きょう一日何をしようかというのをそこから始まる休日があるのは、すてきなことかなと思って、一つ目に書かせてもらいました。

2番は、書いてあるとおりです。やはり、坂本さんが一つ目玉になっている国際芸術祭は単年度のことですけども、中長期的に施設なら施設、イベントならイベントの方向性を示してくれる方、会社であれば社長のようなものが必要ではないかと思います。どうしても散漫になっているようなイベントは一つにまとめ上げられていくべきだし、そこで一つブレーンができて、いろいろな事業が発展していくといいなと思っています。

500m美術館に関しては、石川委員のおっしゃったようなことはすごくおもしろいと思います。僕は、どうしたらいいのかなと思って、どうせなら地下歩行空間に行ってしまうというように3番目に書かせてもらっています。本当に各駅にあるような形で広がっていくというのもすごくおもしろいと思いました。

4番目も書いてあるとおりですが、やはり、演奏会はK i t a r aがありますが、劇場で演劇が行われている、バレエの公演が行われている、オペラが行われているということがあって初めて劇場が成立されると思います。当然、場所を貸す施設は必要ですけども、劇場法ができて、これからのことなのかもしれませんが、これだけ人口のいる札幌市には必要ではないかと思います。

5番目は、何名かの方々も書いていますが、子どもに対しては、早いうちからそういったものに触れていくことが必要だと思います。僕は、札幌市で生まれ育っているのですけれども、小学校、中学校はもちろん芸術鑑賞がありました。これは住んでいたところにもよるのかもしれませんが、もう少し早いうちから触れていたかったなという個人的な意見もあります。やはり、これは拡充していくべきことだろうなと思います。

6番目の札幌バレエ団の設立は、バレエに対する個人的な思いもあるのですけれども、別にバレエではなくても構いません。ただ、トップランナーをつくり出すことは、札幌を成功させている札幌市だからこそできることではないかと思ひまして、次は何だろうと思ったときに、バレエ団の設立は夢があるなと思って書かせていただきました。

7番目です。単純に映像作家が育っていく土壌というのはこれからのことでしょうけれども、雪まつりなどでもやられていますし、これからもイベントでいろいろなところで取り入れられていくと思います。これは、民間がやることかなとも思いますが、こういったことに手をつけるのは難しいと思うので、そこで何か一つあってもいいのかなと思いました。

8番目は、僕は結構大事なことはないかと思っています。この円卓会議に教育大学の方も参加していますが、学べるところは増えたように思いますけれども、そういった方々が学んだことを実践して働いていく場所がなかなかないと思っていますし、雇用まで含めた上でそういったものが考えられるべきであると思いました。

ホームページに関しては、僕は余り得意ではないので、ほかの方がいろいろ書かれているとおり、もう少し活用していくべきではないかと思っています。

アートセンターに関しては、きょうだけではなく、前日も前々日も触れていたように、今すぐにでもということはずっと思っています。

11番目は、デザインのいい悪いを考えて書いたわけではないですが、あのデザインであれば、こういった掲示の方法がもっとみんなの目につくのではないかと考えて、単純にそれだけを思いつきで書きました。済みません。

12番目は、僕がずっと何十年ぐらい前から思っていたことです。そのころはまだ劇団四季が札幌に来ていないけれども、東京はもちろん、福岡や仙台でも劇団四季が見られる、シルク・ド・ソレイユの公演が来る、札幌では見られない大型のエンターテインメントショーがほかの都市に行ったら見られるというのは、物すごく寂しく思っていました。4年前にやっと劇団四季が戻ってきて、次はシルク・ド・ソレイユを見たいなと、この間、見てきたからそう思って書いたものです。それだけに限らず、市を挙げて観光資源としても活用できる方法で、そういったものもありではないかと思いました。

また、清水委員のアート×貧困という項目ですが、こんな発想はなかったなと思って、個人的に物すごく感動しました。

以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。

舞台関係のことがいろいろとテーマとして出てきたのがおもしろいと思いました。

清水委員、どうぞ。

○清水委員 私は、割と思いつきで書いているので、一個一個説明しなくても大丈夫かなと思います。皆さんのものを読んで、自分の視点がこういうところだったのだなと感じたこととか、皆さんのものでいいなと思ったところを交えて話したいと思います。

まず、これが届いたときに、皆さんの意見を読むのが楽しみでわくわくしました。私がすごく大きく感じたのは、南副委員長はすごく夢があると思いました。私は、これぐらいだったらできるかなと予算とか実現可能性ばかり考えて小さくまとめた気がしたのです。いろいろな人にいいネタはないかと話しながら考えていたのですが、ある人から、予算などはあるものから考えたらだめだよ、とってくるものだし、つくるものだと言われました。私も、南副委員長のようにすごく大きいもの、もっと夢のあるものを考えればよかったなとすごく思いました。

具体的に私にない視点だと思って見ていたのは、北村委員長の放置自転車です。これは、札幌の観光客の玄関口である駅で問題になっていることをアートの力で解決できたらすごくいいなと思って、何かいい方法がないかと考えたくまりました。

南副委員長の4番の異ジャンル交流プログラムも、美術と音楽とかいろいろなジャンルの芸術があるけれども、それを組み合わせたり、組みかえたりして新しいものをつくっていくということですね。私が考えたのは本当に単純で、コンサートホールで美術展をやったり、演劇ホールで何か違うジャンルのことをやるぐらいしか思いつかなかったのですが、こういうものもすごく刺激的な何かを生み出す力になる視点だなと思いました。

7番の姉妹都市文化交流も、それを使って何かするのにいいと思います。姉妹都市という視点は、私になかったので、考えたいと思いました。

石川委員の封筒のツールや窓口は、すごく実現できそうだし、効果がありそうだと思うて、いいなと思いました。

500メートル美術館にプラスというものも、自分の使っている駅に1メートルでも美術館があったら、マイ美術館という感じですごく関心が高まるし、多くの人がマイ駅で美術館ということで、そこに創造都市というメッセージを込めていけば、余り認識がない人たちの認識を高めるのにすごく効果的だなと思いました。

あとは、アートセンターの建物ではなくてコンテンツをまず先につくるということです。アートセンターのことを考えるというのはすごく重要で、やはり、この会議の中でやっていきたいことだと思いました。

尾崎委員のプロジェクションマッピングは、札幌市は、今、メディアでユネスコに入っているんで、私も忘れていたけれども、映像作家の育成というのは、やっていかなければいけない重点ポイントの一つではないかと思いました。

自分のアイデアも言っていきます。

さっきお褒めいただいたアート×貧困は、私がやってきて、話題性を呼べるようなネタをいろいろ考えたいなと思いました。石川委員が言ったように、創造都市の認識が余りない人に認識を持ってもらいたいとなると、効果的に広報、宣伝することが大事だと思うので、やはり、インパクトがあったり、反響なんかがあること、メディア露出を意識したようなプロジェクトを何かやっていくことが効果的ではないかと思って、いろいろ考えました。

一応、10個にしたのですけれども、ほかにも何個か考えたので、100個に足りなかったら出していきたいと思います。最初に言ったキャンペーンソングをつくるということも書き忘れてしまいましたし、コンシェルジュとかアーツカウンシルの話は余り考えないでここに来たので、考えていかなければならないなと思いました。ただ、札幌は、東京、大阪に比べてお金持ちが少ないし、欧米では貴族が担い手になっているようなものだと思いますので、サポート体制や担い手を考えるのはちょっと難しい問題かと思います。

もう一つ、これを書けばよかったなと思ったことは、東川町の産まれた子どもに椅子を贈るプロジェクトです。子どもと、椅子をつくる家具職人もアーティストを育てるということで、すごくいいコラボレーションをした企画だと思います。札幌市でも、子どもとアーティストを結びつけるプロジェクトが何かできたらなと思いました。

あとは、書いた中でわかりづらいことがありましたら、質問してもらえればと思います。これで終わります。

○北村委員長 ありがとうございます。

清水委員こそ、大変夢のある具体的な提案だと思います。これがラッピングされた電車が走ったりすればとても目につくし、具体的に実現可能なものがあるって、私も楽しく読ませていただきました。

次は、鈴木委員、どうでしょう。

○鈴木委員 私が出したものは10個に届かなかったのですが、人材育成につながるものが多いと思います。ポイントとして考えていたのは、子どもに対する育成と、私たちみたいな学生に対する育成と、大人に対する育成の三つのジャンルをしっかりと分けて、それぞれの年代によって芸術の楽しさの感じ方が違うと思いますので、それぞれが楽しめるような、アートというふうに認識せずに日常的に感じられるようなものを出していったほうがいいのではないかと思います。これから簡単に説明していきたいです。

一つ目は、食×アートということで、イベント名は忘れたのですが、東京のほうで食を工夫して表現するアーティストの方がいらっやまして、ゲリラレストランという感じで、地下歩行空間とかいろいろな人たちが通るところで、突然、食べ物を作品としてウォーキングしながら人に配って食べてもらうみたいなことをやっていたことがありました。北海道といえば、食というものが創造都市よりも先に大きなイメージが固まっているので、そことかけ合わせて、食もアートの一環ですよというふうに市民に提示できればいいのではないかと考えました。

二つ目の子供たちに自由に街を自分色に染めてもらうというものと、七つ目の大通の十字交差点、4プラがあるところにチョークで絵を描いてもらう、これは大規模なことになるとは思いますが、児童に対するもので、やってみたら楽しいのではないかと考えていました。小さいときは、大きいものに憧れると思っていて、私もトランペットをやっていたのですが、最初はチューバとか大きい楽器をやりたいかったです。だから、もっと市で協力して、大きいものに描く、もっと自由に自分を解放して表現するというような、学校ではできないことをやってみたらいいのではないかと考えました。

三つ目は、SAPPORO ART CAFE WEEKとあるのですが、札幌市のアーティストと札幌のカフェ、喫茶店の関係をつなぐようなことができればなと思いました。結局、美術館に行かないと作品を見ることはないと思います。

500m美術館もありますけど、札幌の至る所で、アーティストの作品を、私のお店はこの作品が合うなというふうに、営業されている飲食店の方に選んでもらい、お客さんが来たときに喫茶店が美術館となって見られるようなイベントができれば楽しなと思いました。

四つ目は、大人がアートを学べるオールナイトイベントとあります。これは、可能か不可能かは別にして、ダンスとか体を使ったライブペインティングという大人の方だけが楽しめるようなイベントがあってもいいのではないかと思います。これは、単純に私が参加してみたいなということもあるのですけれども、子どもだけを育成しても、結局、子どもに足を運ばせるように行ってみたらどうかと声をかけるのは大人ですから、大人が創造都市を応援するような取り組みをしなければ、子どもに足を運ばせるようなきっかけはなかなかできないのではないかと、提示します。

あとは、ART COLLEGE ART FESTとあります。これは、私が個人的に札幌市の美術系とか音楽系の学生を集めて食事みたいな感じでパーティーを開いたことがあります。そのときに、リアルにいろいろなことを勉強している芸術系の学生の方から、こういうのがあったらいいのになという話があったので、これを機会に言ってみたくて思っていました。廃校になったところでもいいのですが、常になくてもいいのです。一定期間でもいいので、学生の人たちが本気でこういう作品をつくっているというのをただ展示するのではなくて、作品販売として札幌市民の方たちに見てもらいたいということと、自分たちで売り出すのは、最初は1人でやるのは結構勇気が要ることです。そうではなくて、みんなで一度、北海道の学生が力を合わせてやってみようということができれば、人材育成というか、将来、アーティストとして活動していこうという気持ちになる人も出てくるのではないかと思います。

六つ目のアイヌ文化普及事業は、私は就職活動の関係で空港に行く機会が結構ありまして、そのときに、新千歳空港の国際方面の扉にアイヌの文様が自動ドアなどに掘られているのを見かけました。確かに、今、札幌駅の地下歩行空間には、作品というか、アイヌ文化のものが展示されているのですが、ちょっと目立たないと思うので、自動ドアでも何でもいいのですけれども、もう少し文様を入れていって、自然に溶け込ませていった方がいいのではないかと思います。

あとは、「あなたの人生を教えてください」手形をつかったアートは、JR札幌駅の近くに定期的に作品が展示されています。それに近い感じですがけれども、自分たち一人一人が作品づくりに参加することができますよという最近はやりの参加型イベントがあったら楽しいかなと思いました。

九つ目は、ぱっと思いついたことなので、深くは考えていないのですけれども、私は、夜に大通公園に座って人が遊んでいるのを見るのが好きだったりするのですが、最近、取り締まりが厳しくなって、そういう活動がなかなかできないという話を聞いています。私は、なかなか問題はあるとは思いますが、20代の子たちにもう少し表現の自由を与えてあげてもいいのではないかと思います。

つけ加えさせていただきますと、500m美術館の場所を移動したらいいのではないかという話をお聞きしましたが、あれは、あそこの場所をいい空間にしようと思って設置されたのかなと思っていたのです。あれは、500m美術館ではなくて、あそこの周りの整備から始めなければいけないかなと思いました。あそこは、作品がかわいそうというような話をすごく聞きます。私たちが作品の展示ブースの掃除をしても、あそこは古い、寒いし、あんなところに一生懸命つくった作品を置くなんてかわいそう過ぎるという話を聞いて、そういう認識を持たれているのだなと最近感じることもありました。市でやることなのかどうかは別にして、あそこの空間がもう少し明るいものになればと感じています。

以上になります。

○北村委員長 ありがとうございます。

世代別にどうアートがかかわっていけばいいのかというのは、とても大事な視点かと思えます。500m美術館は、私もいろいろかかわっているので、責任があります。

富田委員、どうぞ。

○富田委員 僕は、多分、皆さんが話を重ねていくと、大体のことが言われるぐらい、割と共有できているのではないかと思います。一つは、皆さんがいろいろおっしゃったことの根幹に当たることになるのではないかと思います。すぐに手をつけなければいけないと皆さんがおっしゃっていたアートセンターですが、僕は、とにかく何をしても、すごく真面目で固いことを言いますと、夢をアートで語るとして、まず市民が社会的包摂というか、市民の居場所を見つけたり、異文化、異分野のコラボをしたり、そういうものをするの下支えとして、芸術文化の世界のレベルを知ること、そして、その情報を、ネットワークをもってアーカイブしたり、研究調査をできる機能を持つ、それをしていかなければ、何をしても薄っぺらいものになってしまうので、まずそういうことを進めていきたいと思ったので、順番がばらばらですけども、3と6を書きました。

これは、すぐに見えないことかもしれないのですが、その後にはやること全て反映してくる軸になってくるというか、ベースになってくるようなものだと思います。これがやはり創造都市というものが市民に浸透していない、創造都市とは何か、もっと言えば文化芸術とはどういうふうに考えていくのか、例えば創造都市を進めると何が達成できるのかまで深く考える機能が絶対に必要になってくると思います。円卓会議みたいなものは、ある種、そのモデルではあるのですが、そこをもっと盛んにしていくことで、それがつながっていくこととして、3と6みたいなことを提示させていただいています。

アートインフォという言い方をしたのですが、やはり、アートというのは世界的な視野を持って、その情報を集約していった、それをするによって、これはただ集めるだけではなくて実践的なものとして、例えば人の行き来はすごく重要だと思っています。キュレーターであるとか、アーティストであるとか、リサーチャーの人たちが世界と結ぶというように札幌市もかなり前から言っていますので、こういうことを盛んにしていくことが重要ではないかということです。

6のアーカイブ、データベースは、やはり、僕は、札幌でも今は文化がないと全然思っていないくて、割とたくさん文化にあふれたまちだなと思っていますが、それをつなぐことができているのではないかと考えます。そういう意味で7につながっていくのですが、アートイベントとか展覧会、公演を横断的に網羅して、先ほど観光文化ステーションというお話が出ていましたけれども、あれはただ羅列してあるだけで、情報のマッチングができてないわけです。何を選んでいいか、何が見たいのかさえ、すぐには見る気が起きません。たくさんあり過ぎて、まあ、いいかみたいな気持ちになるのではないかと。一番の入り口、北村委員長はポータルとおっしゃっていましたが、最初に触れるファーストインプレッションとしてのアートを大事にするために、こういう窓口をアウトリーチするときにどういうふうに語りかけるのが非常に大事です。何に興味を持っていて、では、この人にはこういう情報を届けてあげようと、例えば、アートセンターの情報の編集力も含めて必要になってくるのではないかとということです。

まず、それが1点あります。そういう下支えというか、そういう力をもって、初めてなされていくことで非常に素晴らしいものになっていくのではないかとということです。

あとは、結構言われていますが、1とか5は、やはり意識調査にもあるのですが、これからアートはどのようなものに、文化芸術は必要であるが、それは何にかけるべきかといったときに、やはり意識調査は簡単なものですが、札幌市民2万人ぐらいに文化施設に置いたものからアンケートをとったものです。それは、これからの子どもの教育とまではいかないですが、未来に育つ子どものために文化芸術は行われてほしいという話が多かったので、これをやっていく必要があるのではないかと思います。それは、やはり、基本の小学校とか教育機関とは別の立ち位置でも十分にできることをしなければいけないと思います。変に教育を変えるという視点ではなくて、いろいろな多様性を認めるための、アートというのは多様性を含んでいるとか寛容であるということがテーマになってくるので、そういうことをいかに子どもに伝えていくことができるかということも、一つの可能性として育てていくべきものかなと思っています。

そんなことがあり、下の2ですが、鈴木委員が年齢でマッチングしていけばいいのではないかとおっしゃっていたと思います。僕は、子どものワークショップをやっていた経験上、実は子どもがいると親が来るのです。親が来たときに子どもの様子を見ていて、うまく組み上げられれば、親が勉強しているという感じになります。アートの勉強もどこから入っていいかわからないし、簡単なことは恥ずかしくて聞けないということもあるかもしれません。その障壁を取っ払うために、その入り口として子どもと一緒に教育と書きました。子どもがつくる展覧会は、発想を逆転して、子どもが展覧会をつくれることはないかもしれませんが、子どもに対して伝えることにより、例えば編集することによって、いろいろな展覧会をつくっている人たちですね。美術館の人たちがどういうふうに伝えるべきかを考えざるを得ない状況になるわけです。子どもが勉強しているというのもありながら、その周りがともに育つというような意味が含まれています。そのような感じです。

あとは、4の市民記者です。こういうアート放送局、アート新聞、アートマップで、特に国際芸術祭のことが言われていますけれども、とにかく情報を伝えていくために、完成形ではなくとも、どういうプロセスであるか、何がおもしろそうだとすることを市民目線でわかりやすく伝えていって、露出していってもいいのではないかと考えています。そこがこれから市民の興味につながっていくのではないかと考えています。やはり、自分が参加することで熱中してもらおうということや、それにかかわることによって、ひょっとしたら居場所を見つける、興味を何も持てない人たちがアートのおもしろさを見出すこともあるのではないかと考えています。

8番ですが、美術館の夜間開館は、さっきから何回も言って申しわけないですけども、観光情報ステーションや既存の今ある札幌の文化施設をちゃんと活用していったポテンシャルを引き出すというふうに、やれることはまだあると僕は思います。そういうところからどんどんアプローチしていくということをしっかりやっていくことによって、一回、足を運んできた人にちゃんと情報を届けるような仕組みをつくったり、メーリングリストはやっていくべきではないかと考えています。

9は、ものすごく大きな僕の夢で、本当に夢想のレベルですけども、同時に、札幌にいる人全員がかかわるぐらいの規模のパブリックアートですね。僕は、創造都市やメディアアートは、テクノロジーという側面や親和性があるのですけれども、人がかかわっていくとか、まちそのものがメディアアート化するみたいな視点が、僕にとってパブリックアートの拡張みたいなことになるのかもしれませんが、そういう視点で人と人との結びつきがさらに強まるような、札幌市は本当に都市なので難しいのですけれども、特に人と人との結びつきが作りづらいのですが、やはり、札幌にいる意味とか、地域性なのか、コミュニティなのか、そういうところにアプローチすることによって自分たちが自覚するということもあると思います。

最後の10、11は、僕がアーティストとして純粋にいいなと思ったことです。これは重要だと思うのは、異ジャンルでの話し合いやクロストークなどいろいろあるのですけれども、僕の経験や印象で申しわけないのですが、やはり、50代ぐらいの人とがっちり話してみたことが余りなくて、ぽっかり抜けています。それで、ジェネレーションを余り気にせずのがっちり話せるサロン、トークの場、対話の場みたいなものが欲しいなと僕は考えています。やはり、そういうことをしないと盛り上がっていかないし、ロールモデルと言っていいのでしょうか、学校の先生とはまた違う背中を見るような、兄貴分のような人がいると、緊張感が生まれるし、作り手として教えらえることも多いです。特に教えるということではないのですけれども、話を闘わせることによって、どんどんいい効果が生まれるのではないかと考えています。僕は、実際にそういうことをやりたいなと今でも思うし、上の年齢のアーティストにどうかかわろうかなといろいろ考えています。

11は、これもアートセンターですけれども、オープンラボというか、スタジオ機能と言うのでしょうか、例えば舞台だったらパフォーマンスですけれども、そういうスタジオが常に使えるような、可変的にできる、考えたことをすぐに試せるようなスタジオ機能が札幌の中心部にあったら物すごく変わるのではないかと考えています。アーティストとしては、つくる場所、スタジオは非常に重要なので、そこから何か生まれたいということも多いです。それが、例えばオープンスタジオみたいなところで皆さんが自由に出入りできる場所とか、ただ見るだけではなくてそこで対話を行ったりという試みをやっていくべきではないかと考えています。

○北村委員長 ありがとうございます。

お伺いしていて、キーワードはオープンであることかなと思いました。オープンであるというのは、世代間もオープンであるし、市民がイベントに参加することにもオープンであるし、まち自体が世界に開かれていて、オープンであることが大事かというふうにお伺いしました。

山田委員、お願いします。

○山田委員 一つは、1番にありますけれども、情報の発信と集めることです。札幌は、例えばアート情報がたくさんあります。とにかく、ほかの市町村に比べると、あり余るほどありまして、それをどう活用するかが大事なかなと思います。興味のある人は自分からどんどん選んでいくのだけれども、知らない人から、それを知っていたらコンサートに行ったという声もたくさん聞きますので、情報をたぐり寄せられない人と言ったら語弊がありますが、知っていたら行くのですが、たまたま情報を得られないということに対して、いかに札幌全体としてやっていければいいかということをもとめてみました。

そのきっかけの一つは、実は、私の仕事柄、教育文化会館のほかに南2条東6丁目に札幌市民ギャラリーというものがあるのですけれども、そこにも行くのです。そこへ行ったら、絵画から、書道から、工芸その他いろいろなジャンルがあるのです。あそこの稼働率は8割から9割あって、今日も行ってきましたら、今週は6団体ぐらい使っているのですね。毎週1日だけ行くのですけれども、本当に多種多様な方々のご利用があるということとは、それだけアートにかかわっている人が多いということです。そして、市民ギャラリーだけではなく、市内にはギャラリーから美術館から、ほかの市町村に比べると札幌はたくさんありますから、そこに自分でかかわる人が多いこと、それから、見に行く人は、先ほど申し上げましたが、自分から情報をたぐり寄せられる人は行くけれども、残念ながら、どんなことがあるかがわからないとなかなか行かない人に分かれていると思います。

そこで出してみたのは、私の事業案の1番にあります観光文化情報ステーションです。これは、尾崎委員も富田委員も先ほど触れていましたけれども、このステーションや、これからできるアートセンターで芸術文化情報の収集と発信ができる場所があればいいな、そういう場所を考えたら、5年、10年先のせっかくある情報の活用ができるのではないかと考えてみました。

それとかわりあるのが4番で、これは、私がちょっと申し上げました札幌市内の美術館やギャラリーの展示情報です。今、何の展覧会をやっているということを一目でわかるものをインターネットでできたらいいなと思います。

そこに括弧で書いていますけれども、私は北海道新聞をとっているのですが、来週の予定が出ているので、そういうことを知りたいので見ます。しかし、新聞をとっていない人は見ないです。見ればあるのです。ですから、そういう情報をまとめたところが欲しいということです。

それと関連して6番ですけれども、これは二つの意味があります。アート・コンシェルジュと書きましたが、今の情報の整理、それから、聞かれた場合に答えられることもあるのですけれども、そのほかに、いろいろなジャンルの市内在住あるいは活動中のアーティストをつなげてくれる人がいいなということで書きました。

あとは、産業の芸術化とか生活の芸術化です。前回、南副委員長がそういう視点で考えることもあるとおっしゃっていて、ちょっと考えてみたのが2番の地域ごとのアートの拠点と、3番の生活の拠点の中でのアートの意識化を挙げてみました。

特に、地域ごとというのは、何げないふだんの生活の中で感じられるアート、無理なくアートになじもうということをやると、とにかく自分の生活の中に合ったものを、今、だんだん高齢化していくと億劫になって外にもだんだん行けなくなりますので、地域ごとに何かなじみやすいアートを見つける仕組みづくりができればいいなということで書いてみました。

3番は、どうやったら芸術文化作品を産業化とまではいかないのですけれども、何か企業でかかわる仕組みができると、実際に製品化するとお金にもなりますから、そういった面で何か考える仕組みができればいいなということで挙げました。

最後は5番です。今、夏の風物詩と言われている二つにパシフィック・ミュージック・フェスティバルと、サッポロ・シティ・ジャズがあります。そのほか、大通公園では、いろいろな食べ物のことがたくさんありますけれども、最近、ここ3年、演劇でも多くの方に来ていただこうと。それから、初心者の方といいますか、余り劇場に足を運んでいなかった方も呼んでいこうという動きが出ております。そういうことで、演劇でも盛り上げる仕組みはどうだろうか、そして、演劇に限らず見て感動した後はエネルギーを使うので、おなかが減ります。ですから、近隣の飲食店のもとに結びつける仕組みづくりができればいいなと考えました。

今回、説明があっち行ったり、こっち行ったりしましたけれども、以上の七つのことを挙げてみました。

以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。

山田委員は、NHKのラジオ番組に出ていますね。僕らは、毎朝、テレビを見ると、きょうのエンターテインメント情報とか、きょうの芸能界はどうだとか、何だかんだと東京の情報が入ってきます。ああいう形で、毎日、きょうの札幌のアート情報みたいなものが3分でも5分でも毎日流れていると、情報はすごく広がると思います。別に誰と誰がくっついたなんてことはどうでもよくて、もっとおもしろい情報がいっぱいあると思います。

尹委員、何かあればお願いします。

○尹委員 皆さんのどの意見もすごくすばらしくて、平均10個ずつの90個ある具体的な事業案は、最終的にどうなっていくのかという思いが最初にあります。ここですごくいい話を出し合って、いい意見があるのを文化部の方々が実現化していただけるのか、まずそこがどうなっていくのかが一つ疑問です。

変な話、この円卓会議が何回か続くかわからないのですけれども、こんなにいい意見をみんなが持っているのに、この会が終わったら解散してしまうのはもったいないというのがすごく率直な意見です。ここに出たアイデアを具体的に実現化して動く人は、やはり提案した人であるのが一番いいだろうなという思いがすごくあります。

私は、事業であったり、行政がかかわってくるとわからないのですけれども、例えば自分たちで企画したら手売りでチケットを売って、宣伝して、どうにか人を埋めようと必死になります。ただ、行政が絡んでしまうと、皆さんは努力して人を集めようと頑張っているのわかるのですが、そこに少し違いを感じています。できれば、こういった意見をまとめて本当に実現化できる観光文化局附属のプロジェクトチームみたいなものをつくって、意見を出した方や、さっきもお話があったのですけれども、文化芸術は、どうしても一流に接しないとレベルは上がりませんし、いつまでたっても文化が発展しません。そういった意味でも、プロの方もまぜながら、具体的に実現していったらいいな、実現していただきなないなということを最初にお話ししたかったのです。

私は10通りのものを書きましたが、皆さんのアイデアを全部聞いた後に私のチープなものを発表するのがすごく恥ずかしい気持ちにはなるのですけれども、私自身は、どちらかというと舞台に立ちたいほうの人間なので、演者的な目線から見ての提案が比較的多くなっていると思います。

最初のカルチャー発表会は、札幌市内にカルチャー教室がたくさんありますので、教室単位で発表会があったりもしますけれども、やはり、芸術をやっている方は、自分の作品をどこかで見せたいという気持ちは必ずあると思います。素人でも、例えばこの日に向けてというふうに練習すると技術も向上しますし、生活に潤いというか目標があって、人生を歩いていく上で、一主婦で埋もれてしまい、平凡に毎日が過ぎていくよりも、何か目標を持って潤いを持たせると、一人でも多く心が豊かになるということも一つの文化芸術につながると思いますし、アートと言うのかよくわからないのですけれども、そういったものにもつながっていくと思います。ちょっととした趣味で、50代、60代でバレエを習っている方も本当に多いです。

そういった方や、三味線を習っている方とか、リコーダーを習っているとか、そういったいろいろなカルチャー教室から発表して、市でそれを横につなげて主催してくれる事業があればいいなということが一番強く思って、1番に持ってきました。

札幌市内は、小さいものから大きなものまでいろいろな箱がありますので、そういったところを活用して得た資金をまたこっちに充ててくれるというとおかしいですけども、先ほど話に出たように、予算がどれぐらいかは私たちには見えませんが、どうしても文化芸術はお金がかかりますので、そういうものをうまくつなげていけばいいなと思います。

あとは、いろいろ書いていますけれども、子どものころから音楽や楽器、歌に接していれば、自然とその中で心を育てていくのもそうですし、将来のプロが出てくるかもしれないので、市の事業として幼稚園や保育園、小学校や中学校、高校で演奏会があったりしてもいいのではないかと思います。

あとは、ミュージカルをしたいとか舞台関係のことばかり書いていまして、今もあるのかどうか分からないのですけれども、カルチャーナイトがあったと思います。私も一度だけ出るほうで参加したことがあるのでたまたま知っていたのですけれども、もっと大規模なもので小さなものから大きなものまでいろいろなところでカルチャーナイトやカルチャーウィークという形で、いろいろなところで市民参加型で規模の大きいものをしていけばいいなという理想を書きました。

私は、やっている人たちをどうしていくかという視点で書いたもののほうが多いです。ただ、皆さんのお話を聞いていると、目に触れてというところもあります。でも、趣味でやっている方、プロでやっている方、セミプロでやっている方、皆さんがいろいろな場で披露していく場の提供を市が先導してやっていただければ、それも活性化につながるのではないかと思います。

最後に、先ほど500m美術館とか駅や観光ステーションがどうだという話をされていたのですけれども、私は、公共交通機関はほとんど使わなくて、車です。きょうも大通まで車で来ました。札幌市内は結構車社会だと思います。

私が主に使う道路では、たまに朝とかに、50人ぐらい、歩道に蛍光の帽子をかぶって、蛍光色の旗を持つ人が並んでいるのです。シートベルトをしてくださいということで、50人ぐらい並んでいるのです。36号線は、車のショールームが多いので、多分、地域の取り組みで会社やお店の人たちが1年に何回か、すごいときは本当に100人以上がずらっといるので、シートベルトをしていても、シートベルトをしなきゃと思うぐらい、すごいインパクトがあります。ですから、車社会ですので、車を使った人たちへのアプローチもあたらいいなとふと思いました。先ほど電車のお話をされているのを聞きながら、私は、バスか、電車か、あとはほぼ車ですから、何かやっていてよそ見して事故を起こしてしまったら意味がないのですけれども、本当に事故を起こしてしまうぐらいの感じで、見ると本当に圧巻で、眠気も覚めます。そういう早朝にやっている取り組みとこれも連携していけばいいなと思います。

ただ、こういう視点は、市の方々や見かけないものをぼっと出の主婦が見かけて、こういうところで話をして、そういうものがあつたのだとか、私も全然知らないところでお話を聞いて、そういうのがあつたのだというものがつくり上げていけるきっかけにもなると思います。どうしても文化芸術は、自分たちだけだと何の発展性もなく、ぐるぐるぐるぐる回って終わってしまいます。この会議が終わった後も、これをうまくつなげて、今度はそれを実現化になることを考えていっていただければうれしいなと思います。

○北村委員長 ありがとうございます。

せっかくこういう会議があつて、皆さんに意見をいただいたので、市として、これをどういうふうに具体的に実現していってくれるのか、その担保をもらわないことには、私たちはやっていられないということだろうと思います。

では、南副委員長、お願いします。

○南副委員長 すみません、僕のは、やってもらうと億以上かかるネタを書きました。今、尹委員がおっしゃっていた人生を豊かにしていく、あるいは、楽しみを持つ、市民の生活を豊かにしていく、これが基本的には芸術、アート、文化の基本だと思います。そういう意味では、確かに見る、聞くといったもの以外で自分たちが表現することも確かに大事です。そういう意味で、いろいろな企画をするべきだと今聞きながら思っていました。

僕が考えていたのは、一つは、どうやってアーティストを育成するか、アートを育成していくかということです。人々にとって、そこに距離があるものだから、なかなか親しみを持ってないだろうと思いますし、自分たちがこのアーティストを育てている、あるいは、自分たちがここからつくってきたのだというのを一緒に共有し合う方法はないかということで、地域、商店街、あるいは、自分たちがこれをサポートする、自分たちがこのアーティストを育てたのだと、それは1人ではなかなか難しいです。あるいは、ヨーロッパのように、貴族とか、アメリカのように大金持ちというわけにいかないから、では、商店街レベルでどうか、あるいは、地域でこのアーティストを応援していこうではないかということをやっていたら、もう少し楽しいのではないかというアイデアです。それをつなげる人が必要だろうと思います。それがアートセンターの中にいる人たちの役割になってくるだろうけれども、これをやっていたらどうかというのが最初のアイデアです。

それとともに、盛んに言われている異ジャンル交流プログラムは、いつも交流をやりようというのではなくて、最初にやったアーティスト育成というのは恒常的なアイデアです。要するに、その瞬間ではなくて、何年もかけたアイデアです。それに対して、異ジャンル交流プログラムは、お祭りで、非日常的なものを楽しむものです。やはり、生活は、ふだん何事もしょっちゅうやっていたら日常的になってしまうとおもしろくも何ともないのです。お祭りみたいなところでわっと胸騒ぎがするとき、思い切り違うことをやる、そうすることが刺激になるわけです。そういう期間限定的なアイデアとして、一つ違うものを思い切ってぶつけ合ってみようということです。そういうフェスティバルの中のアイデアという言い方をしてもいいと思います。そういったアイデアを出させていただきました。

あとは、姉妹都市とか、地域との交流で、せっかく姉妹都市みたいなことを札幌はやっているのだったら、これをもっと活用したらというだけの話です。

それから、下は、経済的なことは一切関係なく、好き放題に書かせていただきました。でも、路面電車に乗っていて、風景は余り変わらないから、それだったら大通公園の端っことは道路を少し狭くして、電車を走らせたほうが観光資源にもなるなと思ったわけです。むしろ、南1条の狭い道を走るよりいいのではないか。隣に公園の緑を見ながら走る、冬になったらひょっとしたら雪像を見ながら走るかもしれません。そういったものが最終的には観光資源になるだろうと思います。

それから、一つ強引なことを書いてあるのですが、例えば円山動物園はちょっと遠いです。バスで行くくらいだったら、お猿の電車でも走っていたほうがいいと思います。トロッコでもいいのですが、そのほうが人気が出るだろうと思います。例えば、滝野と芸術の森は全く違うジャンルのものです。例えば、ここでは空中ゴンドラみたいな話をしていますけれども、そういうものでつないでしまったらどうだろうと思います。そうしたら、両方に行って集客があると思います。ゴンドラだったら鉄塔だけで済むからそんなに高くないと言いつつも、それでも億以上行ってしまう話ですけれどもね。

それから、10番のエスカレーター、エレベーターもおもしろいと思います。例えば、駅前の地下のところは、ところどころ、明かり入れであいていますね。そこに透明の筒がぽんとあって、そこからひゅんと人が上に行って、例えばその上にビルをつなぐ陸橋があったとして、そこにぴょんと上がっていくというのもわくわくすると思うのです。

そういうふうに、一つ一つの公共的なものもアート化していくというか、遊びがある空間にするということです。例えば、大通の一部に空中散歩をするような歩道橋をつくってみるとか、それを全部透明のセルロイドにして下が見えるというのもおもしろいかもしれません。何でもいいのですが、このまちに行ったらこんなものがある、ちょっと行ってみたいな、そういうものが全て観光資源につながっていくようなアイデアがあれば、今度はそれを使って表現してみようよというところにつないでいくこともできるわけです。

そういう工夫はどうだろうという話です。やれるものならやってみろという感じですが、書かせていただきました。

以上でございます。

○北村委員長 ありがとうございます。

皆さんから大変熱心にご意見をいただいたので、もういい時間になっていますが、皆さんといろいろ議論をする時間にしたいと思います。

全員にお聞きしましたが、前回、なぜいっぱいアイデアを出そうとなったかということ、ここから何か共通する理念のようなものや、関心のようなものを抽出できないかということからです。

これは私の個人的な感想ですから、皆様のご意見をいただきたいと思いますが、要するに、1回目で芸術の産業化みたいなキーワードがあって、それはどうなのだろうと疑問を持っています。芸術を産業の手段に使うというのももちろんですが、逆に言えば、産業というか、私たちの暮らし自体がアート、芸術なのだということかと思えます。皆さんのお話を聞くと、私たちの生活の中にどれだけアートの的なものがあるかということがありながら知らないというか、気がついていないところがあります。もちろん、それは十分ではないかもしれませんが、実際の経済活動の中にアートの手法を取り入れるとか、市役所の業務の中にアートの的なことを取り入れるとか、私が書いたものでは社会的なさまざまな問題ですね。伊委員は車の問題などもおっしゃいましたけれども、そういう社会的な関心事にアートの的なアプローチをするということがあると思えます。要するに、私たちが札幌市民として生活している中に、アートの的なものは既にあるし、これからもとても大事だということが一番大事だと私なりに思います。

では、そのためにどうするかというと、一つは、広報、普及というか、どういうふうに情報を集約して発信するかですね。それは、アートセンターかもしれませんが、観光文化情報センターかもしれません。あるいは、札幌市のホームページの更新かもしれませんが、私が言うポータルサイトの構築かもしれません。どうやって札幌のアートの情報、あるいは、山田委員がおっしゃったように、その情報にアクセスしにくい人たちにも届けられるような仕組みを具体的に作るかということかと思えます。

2点目は、アートにかかわる人材の問題で、では、特別な人材なのかということ、例えば、清水委員、富田委員、山田委員、南副委員長もそうですけれども、参加型のアートのことをおっしゃっていました。富田委員だったら180万人、190万人が一斉にやれるような大型のプロジェクトがあればいいですが、ある意味、地域や商店街の問題もあります。かつては盆踊りみたいなものが季節ごとに、あるいは、地区ごとに地域住民をつなげていました。それが、こういう時代になって、盆踊りもない、でも、花火大会があるみたいなところで、盆踊りも一つのメディアだと思います。花火も一つのメディアだと思います。そういう形で地域などをつないでいくようなことを考えれば、アートにかかわっているのは、プロフェッショナルなレベルから、伊委員がおっしゃったようなアマチュアのレベルまでいろいろあると思えます。どんな方でも、盆踊りに参加している限り、アートにかかわっているのだということ意識していただければ、190万人全員が行っていることがアートと言わなくてもいいのかもしれませんが、そういった場を提供しています。もう少し新しい形で、世界各地で参加型のアートイベントがたくさんあります。そういったものも札幌でいっぱい開催できる機会はあると思えます。

人材では、幾つかのレベルがあり、今言ったアマチュアとプロフェッショナルのレベルと、もう一つは、清水委員や富田委員がおっしゃった世代の問題です。例えば、21美では、学生というか、20代、30代の人たちがどういうふうにアートにかかわれるのかを年間を通してワークショップをやり、そういうことにかかわるようなことをやっています。

もちろん、皆さんおっしゃるように、子どものころから接することができる環境を整えるということと、学生あるいは現役の世代だとアートとのかかわりが薄くなるかもしれません。現役を引退すればボランティアでもやろうかなという人もいるかもしれません。そういう世代の問題が一つあるかと思います。

もう一つは、機能の問題、役割の問題として、ボランティアをやる、あるいは、コンシェルジュで案内人をやる、もう少し専門的に企画をしたりキュレーションをするような人材をどうするか。尾崎委員は芸術監督のことをおっしゃったけれども、札幌市のアートの芸術のトップに立ってもらえるような人は、アートセンターの長だと思いますけれども、そういう機能の問題で、プロフェッショナルなアートセンター、あるいは、芸術監督的な人からキュレーションする人から、もう少し身近なところで、案内、コンシェルジュしてくれる人から、自分から進んでお手伝いしたいボランティアの方まで、そういう機能の問題で人を整理できると思いました。

私の具体的なことは、読んでいただければと思います。

もう一つ、人材のことで言うと、これも尾崎委員からですが、育成はするけれども、それを札幌市としてどう活用するか、育てていくかということです。札幌市がアートにかかわるキュレーターとかマネージャー、ディレクターたちの雇用の機会をつくっていかなくてはいけないと思います。

皆さん、500m美術館のことをおっしゃってくれまして、そのとおりだと思いますが、2番は芸術監督のことです。

3番は、広報のポータルサイトのことです。

4番は、先ほど山田委員からありましたが、毎日、毎日、アート情報がテレビやラジオから流れてシャワーのように浴びて、きょうのアートはどこで何をやっているかがインターネットに接しない人でも、テレビをつければ、きょうの7時のニュースで札幌のきょうのアートみたいなことが番組として流れているといいなと思います。ただ、これはなかなか難しく、例えばSTVが後援している芸森の「写真力」に行ってくださいとほかの放送局の方はなかなか言えないかもしれません。ただ、先ほど山田委員が言ったように、あのギャラリーではアマチュアの団体が毎週のように展覧会などをやっているわけですから、そういったことを公的に広報するような形ですね。

5番は、札幌市がメディアアートの関係で創造都市のネットワークに入ったのであれば、入っただけではなくて、これから相当長い期間、メディアアートを札幌として打ち出していかなければなりません。そうすれば、拠点となるような場所が必要かと思います。一番大きな構想で、例えば、国立のメディアアート美術館みたいなものを札幌市に誘致するようなことまで考えて、何か札幌がメディアアートを中心に活動しているのだという拠点が必要かと思います。例えば、市の資料館の活用方法などを国際芸術祭のときに考えられるようなので、その方向もあると思います。

6番は、いろいろブレーンストーミングして、こういった事柄に何かアートがかかわれるかと思いました。

7番、8番なども読んでいただければ結構です。

私は、そんなまとめで聞きましたけれども、皆さん、お互いに聞いて、このことはどうでしょうという質問なり意見なりがございますでしょうか。

○富田委員 先ほどは言いっ放しになっているところがあったので、補足をさせていただきます。

例えば、参加型であるとか、開かれているということ自体は、北村委員長がおっしゃったように、文化芸術は誰もが、アートは日常のそこら辺に転がっているものであります。もしその人を見出せば見出せるものかもしれないですが、さっき言ったアマとプロの問題は結構重要なことだと僕は思ったのです。すごく評価されてレベルが高いもの、これは何と言っていいかわからないのですけれども、ハイハットなのか、もっといい言い方があると思うのですが、歴然としてクオリティーみたいなものがあります。プロがいて、アマチュアがいます。例えば、参加型であるとか、非常に開かれたワークショップとかプログラムをやっているのだけれども、一方でちゃんといいものをきっちりと届けて行って、それを評価できることも同時に両輪で行われなければいけないと思います。そうしないと、参加型のプログラムは、全然意味のないものになってしまうというような気がするので、そこは開かれたらいいけれども、どこかで締めていかなければいけないという印象をすごく持っています。

そのときに、もう一つ重要なのは、芸術センター長というか、ディレクションをできる人です。さっき道路のことをおっしゃっていましたが、やはり外の目を見て、日常にいろいろ含まれているものであれば、外の人でなければ気がつかないこともたくさんあるし、そういうことを交換していくことによって、自分たちはこういうものを持っていたのだと、逆説ではないですけれども、それで気づくこともたくさんあると僕は思います。

そういうものを見出す目と言うのでしょうか、ある種の目ききみたいな人たちがどんどん育つ、それがアートマネジメントの人材の育成なのか、それを一番最初に引っ張るのは、既にかんりの能力を持ったアートセンター長か、ディレクターではないかと思います。それも、短期ではなくて、ぼっと来てやっていくのではなくて、ちゃんと札幌にコミットして行って一緒にやってくれるような人材が一番望ましいと思います。

○北村委員長 私もそのとおりだと思います。

ただ、演劇人であったり、音楽人であったり、それで生活ができる人ですね。多分、今、演劇をやっている方は大変だろうと思いますし、ほとんどがバイトで生活費を稼いで舞台上に上がっております。そうではなくて、札幌交響楽団はいいモデルになると思いますが、そういう形で音楽人や演劇人、美術家や彫刻家といったアーティストがプロフェッショナルとしてこのまちで生きていけるように私はアートバレーみたいなことを考えました。ただ、それは、相当思い切った予算措置などをしないと難しいところです。

ただ、先ほどの人材のことで、プロフェッショナルとアマチュアの問題ですが、開かれているのは誰でも参加型で、そこをリードしてくれるプロフェッショナルの方が誰かいないといけないと思います。あるいは、プロをさらに統合するような、ディレクションしてくれるような方がいないと、なかなか難しいです。アートセンターは、そうあるべきだと思います。

ほかに何かご意見はありませんか。

○南副委員長 いろいろ見させていただいて、一つは、尾崎委員がおっしゃっていたバレエ団の設立は、箱ができて、箱の中に入る固定したものがちゃんとあることはとても大事です。

今言った演劇の劇団をつくるのももちろん大事だと思います。そこで、ある程度、オーディションをやって、プロフェッショナルな人たちを集める、その人たちを市として育てる、あるいは、専属のバレエ団を持っているというところだって、日本全国で少ないわけです。もし無事に育てられることができるのであれば、それだけでも大きな財産になっていくわけです。

この箱の中身をどうするかというときに、やはり見せるものがちゃんと必要だろうと思います。札幌の話になりましたけれども、札幌の場合は、年間300回ぐらい公演しているわけです。365日で300回ではなく、1日何回も公演しているわけです。1回か2回練習して、その2回の練習で地方を朝晩、朝晩回ってくるようなやり方で、それでも助成をもらわないと成り立たないです。これも、恐らく、劇団などの団体をつくったときに、そのくらいの数の公演が必要になってくるだろうと思います。では、それを果たして札幌市だけで賄えるかということ、当然、そうではないわけです。そういったことを考えると、例えば、箱の中をどういうふうに戻していくかということも、今、ここである程度話していくほうが夢があっていいと思いました。思ったことを一つだけ言わせていただきました。

それから、プロとアマの問題ですが、やはりプロフェッショナルなものは必要です。確かに、わかりづらいものもいっぱいあると思いますけれども、それがあつて、このまち、あるいは都市のクオリティーが決まっていくという部分もあると思います。ですから、そういったものをどう見定めていくかということも大事かと思いました。

○北村委員長 ほかにいかがでしょうか。

事務局で、皆さんの意見の分布図のようなものをつくりました。これは、事務局に作成してもらったものですから、私は全然かわりのないところですが、左側は長期的なもの、右側は短期的なもの、上が公的な行政が主体になるもの、下は民間でもできるかなというものの座標軸で分布してみると、こうなります。やはり、座標軸の左上が数としては多いので、なかなか簡単にはいかないし、できないようなことがあります。右下では、清水委員がお出しになったアート掛ける何々みたいところは、非常に具体性があつて、ある程度は注目しなければいけないものです。そういう分布図になっています。

さらに、それを大きく丸くまとめて、テーマみたいなものを事務局に考えていただきま

した。施設整備、人材の育成、情報発信の改善、具体的な事業展開という大くりになっています。これは正確なのかどうか、もう一回、検証してみなければいけないと思いますが、こんな形になっています。

伊委員がおっしゃったように、私たちの委員会がメッセージとして出すことが、この後、2年先、3年先、あるいはすぐにでも実現していくものかどうかも考えながら、これから議論を進めていかなければいけないと思います。

この分布図などを見て、いかがでしょうか。ここから私たちの円卓会議で議論できるような共通のテーマを何かお感じになりますか。

○清水委員 分布図を見て改めて感じたのは、こうなったらいいなという問題点や改善点になるような項目がたくさんある中で、一つ歯車を回していけば、それに連動していろいろなものが達成されていくのではないかとということです。そう考えたときに、「文化芸術人材の育成！」が重要かと思います。

ジャンルは違うのですけれども、一つ思いついたのは、北大でやっていたCOSTEPという科学技術コミュニケーター養成講座です。あれは、私はよくわからないのですけれども、多分、優秀な先生が大きい予算を集められてきて、魅力的な講座があって、そこに興味がある人たちがどんどん集まってきて、1期生、2期生、3期生と積み重なって行って、それぞれの方が卒業後も企画したり、その先生や仲間とのつながりを使っていろいろなことをしています。これも、知らない人は全然知らないのですが、紀伊國屋でサイエンスカフェや小さなイベントが結構開かれています。

こんな感じで、例えば、札幌市がアートキュレーターでもいいし、アートコミュニケーターでも何でもいいのですけれども、養成講座みたいなものを、できれば10期生ぐらいまで人材育成をして、札幌市内もしくは全国からいろいろな人を集めて、そこで学んで力をつけていく人がいたり、もともとすごく力を持っている人に引かれていろいろな人が来たりするかもしれません。例えば、ほかの問題点の観光文化ステーションの情報が編集されていないということも、詳しい人が何人か集まって、その情報を編集してくれたら解決するわけです。大体の問題は、予算を引っ張れる人があらわれたら解決するので、やはり人だと思います。何か魅力的な、札幌市でも全国でもいいのですが、アートに対する何かを持っている人たちを集める求心力のあるものを一つつくって、そこに集まった人たちがいろいろなものを巻き込んで、これらの提案を実現していくようなことを、10年かかるのか、何年かかるのかかわからないですけれども、そういった感じで人材育成や人材を集めることがいろいろなことの解決につながっていくのではないかと、この表を見たときに感じました。

○北村委員長 ありがとうございます。

人材を育てるということは、1回目の会議のときに富田委員もおっしゃっていたように思います。そういう人が札幌に大勢いて、先ほどの私のまとめ方だと、幾つかの切り口があって、プロフェッショナルなものからアマチュアのものまで、あるいは、世代間の問題、機能の問題としていろいろあると思います。そういった観点で、どういうふうに人材を見ていくのかということがあり得るかと思います。

今日は、あと10分ほどで終了時間になります。私もうまく司会をできていないのですが、この分布図をごらんになって、皆さんの意見を聞いて、私たちはやがてメッセージを出さなければいけないかもしれません。ですから、ここでは四つほどの項目にくくっていただいているのですけれども、もう一度、皆さんに検証いただいて、ここからどういうテーマを私たち円卓会議で中心的に論じていくのか、あるいは、これを網羅できるかどうか分かりませんが、ある程度包括できるような何かフレーズができるかどうか。例えば、札幌はアートにあふれたまちですとか、札幌というのはアートにかかわる人材を育てるまちですとか、それを果たす広報活動が整っていますとか、どういう形になるかわかりませんが、この分布図を見ながら、大きくりのところをもう一度考えていただいて、次回、皆さんのご意見を伺って、この委員会としての中心軸のようなものを定めていくということではいかがでしょうか。

○南副委員長 今、お話を一通り聞いたところで、こういうことかな、ああいうことかな、あるいは、これとこれがつながって同じようなことを考えているなとか、これを取り入れてこうやるともう少しおもしろいなというものが皆さんの頭の中にいろいろあると思います。それをもう少しお考えいただいて、先にフレーズを出してしまうと、どうしてもそれに縛られてしまうのではないかと僕は思います。もう少し言葉がある状態で、この中で整合していけるもの、これをもう少し取り入れていくというふうな、ポイント一つ一つ絞って、こうやってみただけけれども、どうだろうというものを確立していくのはどうでしょうか。

○北村委員長 では、今回は、皆さんにアトランダムに順不同で出していただいたものを、皆さん個人個人の中で整理して、あるいは、ほかの意見を聞いていただいて整理して、大事だと思うものを考えていただくことでよろしいですか。

○南副委員長 一つでなくてもいいのですけれども、ほかにご意見があればお願いいたします。

○尹委員 本当に知識がない中で発言するので、ピントがずれていたら恥ずかしいのですが、先ほど清水委員がおっしゃっていたように、細かいものを一個一個というのわかるのですが、何よりも人だと思えます。これを一個一個実現するにも人が必要というところで、ここにNPO法人と書いてあったのです。突拍子もない発想かもしれませんが、行政とは別に、私たちがこんなに具体的な案を持ってきて話し合っているのだから、先に市民団体をつくって、それをどうやって行政と連携していくのか、そこから予算をどうやって引っ張っていけるかという人というか、その組織をここでつくってはだめなのではないでしょうか。

NPO法人のシステムが具体的によくわからないのですけれども、非営利団体だと思えます。先ほども言ったように、この後、この意見がどうなっていくのかがわからないので聞いてみた部分もありますが、話していくと、具体的にとてもいい案やとてもいい意見がどんどん出てくるのが、私はどうしてももったいなく思えてしまいます。

多分、北村委員長はお声がかかっていらっしゃると思いますが、私や清水委員は自分から歩いてボランティアの一環として来ておりますので、そういう私たちが手っ取り早く非営利団体をつくってしまってもどうか。例えば、アートキュレーターとはどんな人材のことを言っているのかについては、それぞれいろいろな思いはあると思うし、先ほども一流のという話がありましたが、ここにはすばらしいプロの方々もいらっしゃいますけれども、私は素人ですから、そういう人たちが集まって、営利を目的とせず、結局、それをつなげてくれる行政にどうやって話せばいいのかという手段がわからないのがほとんどなので、せっかく意識を持ってきている私たちがつくってしまえばどうかと思ったのです。

荷が重い発言で申しわけないです。

○北村委員長 こういう芸術文化事業を展開するに当たって、全部を市におんぶにだっこではなくて、例えば、今おっしゃったようなNPOをつくって、そこに市から委託をするというのは十分あり得る話です。仕組みとして、NPOを活用して、札幌の芸術文化事業の展開を行うということも大変おもしろいアイデアだと思います。

例えば、清水委員は人材の問題が大事だというご意見で、伊委員は行政と市民がどうかかわるかが大事だというご意見ですから、それぞれもう一度お考えいただいて、もう少し上のレベルでおまとめいただいて、次回、議論を深めていくということはいかがでしょうか。

いきなり抽象的なところでキャッチフレーズをつくとそれに縛られてしまうので、もう少し上のレベルで整理して、私たちの会議の議論の中心になり得るような人材の問題、組織の問題、仕組みの問題を考えていくということはいかがでしょうか。

○石川委員 今回も宿題があると思うのですけれども、どういうふうに考えればいいでしょうか。それは、自分の意見をもう少しまとめるとか整理するということなのか、皆さん全部の意見をいろいろ検討するのか。

○北村委員長 皆さんに聞いていただいたので、ご自身のご意見もあるし、同じようなことを考えている、あるいは違う視点だな、同じことを言いながら違う言葉で言っているなというのがあると思います。今回は、具体的に10個挙げてくださいとお願いましたが、例えば石川委員のお話でしたら、2点が中心軸であり、アートに縁遠い人たちに対してどういうふうにアートを届けばいいかということを出発点の基本にする、あるいは、札幌市の構造自体をアーティスティックにすることを考えるということを最初にお話になったので、そのレベルで皆さんの話をもう一回まとめていただけたらと思います。

○石川委員 おのおのの意見をもっとシェイクするということですね。

僕は大体わかりましたが、ほかの方はどうでしょうか。

○北村委員長 尾崎委員も、最初にこの10個は基本的にこういうことを考えていますということをお話になりましたし、清水委員も、皆さんの意見を聞いて具体的なことから非常に抽象的なことまでお考えになっていたようなので、それぞれのお考えがもう少しまとまったところでご発表いただけるような形ですね。今、清水委員と尹委員からお話をいただいたので、そういったことをもう少しまとめていただいたらいいかと思います。

○南副委員長 私はこういうことを考えていたけれども、今、皆さんの話を聞いていて、ここからさらにこういう問題があるのではないかということを見つけられて、そこからその話をされてもいいと思います。例えば、円卓会議の中で市がやる役割、市以外のものの役割にもっと絞り込みたいという人がいてもいいと思います。その辺は、自分の持ち出ししてきたものをもう少し膨らませたり、いろいろあるだろうと思います。

○北村委員長 おわかりいただけましたでしょうか。もう一回、次回に持ち寄っていただいて、きょうはお互いの意見交換などの時間は十分にとれなかったなので、そのレベルでまたお互い意見を交換し合いながら、スクランブルエッグがもう少し固まっていくような形になればいいのかなと思います。

では、事務局に一旦戻します。

3. その他

○事務局（高橋調整担当係長） ありがとうございます。

そういったものを書けるような様式をこちらで考えてみて、また皆様にお送りして、書いていただいて、期限まで提出していただいて、また皆様にお配りする流れで進めていきたいと思います。

次回は、6月下旬から7月中旬ぐらいまでの間にまたお集まりいただきたいと思います。皆様の日程調整表を出していただきまして、そちらで確定次第、またご連絡させていただきます。

以上です。

○事務局（加茂市民文化課長） 長時間にわたりまして、ありがとうございます。

私も初めて出席させていただきました。過去の議論の経過は文字で拝見していたのですが、活発なご意見をいただきまして、本当にありがとうございます。

次回以降は、今日とはまた違った切り口でご議論いただいて、その中で、これは行政としてどういうふうにやっていくのかというお話が当然出てくるかと思います。その辺は、我々としてもこういうふうにやっていきたいというお話をさせていただきながら、全部をやるのは無理だということもご承知だと思いますが、その辺も含めて、皆様のご意見をお伺いしながら、我々としてもどのような形で進めていくのかを考えていきたいと思っています。私も来てからまだ1カ月半ですが、こういう話になっていくのだろうなと思っていました。これからじっくり考えていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

○事務局（川上文化部長） 長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。

一つだけ、私の感想を述べさせていただきたいと思います。

先ほどの挨拶で申し上げましたが、前職が国民健康保険や社会福祉分野でしたので、どうしてもアートや芸術分野とは無縁の社会で仕事を進めてきました。きょうは、ちょうど北村委員長のアイデアの6番にアートによる社会的問題のアプローチとありました。要するに、こういういろいろな問題をアートの力を使って解決できるということを一人でも多くの市民が感じられるようなものが実現できれば、すごく素晴らしいことではないかと思っています。

先ほど、市役所全体で組織を挙げて創造都市に取り組んでというお話がありましたが、多分、自らやっている仕事の中に、そういう芸術文化の力を使って、一つでも解決できる、新しいことができるというふうになると、単に美術ではなくて、アートを使って我々の問題を解決できる、新しいものを生み出せるのだということの一つのきっかけになっていくのではないかと思っています。それが具体的にどこまでできるかわかりませんが、将来的には、そういったことが札幌の創造都市の一つの特徴になるのではないかと思いつながりながら聞かせていただきました。

どうもありがとうございました。

4. 閉 会

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、以上をもちまして、第3回目の円卓会議を終了いたします。

皆様、ありがとうございました。

以 上